# 非色

有吉佐和子

# 非色

有吉佐和子

角川文庫 2474

昭和四十二年十一月十日　初版発行
平成　三　年　六　月十日　四十五版発行

発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話　編集部(〇三)三八一七—八四五一
営業部(〇三)三八一七—八五二一
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八
印刷所——新興印刷　製本所——文宝堂
装幀者——杉浦康平
本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

あ 3-1　ISBN4-04-126202-X　C0193

# 非色

有吉佐和子

角川文庫 2474

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertong

# 1

私は自分の生い立ちについて多く語ることを好まない。父親のない娘。片親育ちの子供というものは世間にいくらでも例があるからである。貧乏だったということも世間では珍しいことではない。妹より不器量に生まれついたからといって、書いて世の人に訴えなければならないほどの悲劇とは思えない。だから私はそうしたことを陰々滅々と此処に披露しようとは思ってもいないのである。もっとも、こんな私のあまり幸福ではない条件は戦争中は感じる暇がなかった。不幸を一番身にしみて感じる筈の青春期の前半は、私は学徒報国隊という腕章を巻いて旋盤工として夢中で過していた。夜は工員宿舎の一部に泊って、女学生たちはみんなそれぞれの家庭の事情とは関係を断った暮しをしていた。警戒警報。待避。空襲警報。あの最中には、女の子が美人かそうでないかということなど大した問題にはならなかった。

戦災で家を失い、敗戦と共に工場に別れを告げた私は、母と妹と都心を離れた焼け残りの家の二階一間を借りて暮すようになったが、そのときでも貧乏というものの実感はなかった。東京はまっ赤に灼け爛れて、富者や金持と呼ばれる者も一なぎに壊滅してしまったかに見えた。右を見ても左を見ても焼け出された人々ばかりで、おまけにひどい食糧難時代だ。みんなが飢

えていた。食べるものにも着るものにも、みんなが平等に困っていた。

私は直ぐに働くことを考えなければならなかった。女学校は何も勉強らしいことをしないまま、終戦の年に卒業していた。もっとも学歴が役に立つような仕事は何もなかった。日本の首都は爆弾と焼夷弾で滅茶滅茶になったところへ進駐軍を迎え入れて大混乱の最中だった。田舎なら田を耕す仕事が手近かにあっただろうが、根っからの東京育ちの私たちには疎開する縁故先も無かったのである。田舎なら農家の手伝いという仕事にありつけただろうが、東京にはまともらしい仕事は何もなかった。大会社は復興にすぐ手をつけようとはしなかったし、みんな手を束ねて進駐軍のエネルギッシュな仕事ぶりをポカンとして眺めていた。長い戦争に倦み、逃げ疲れ、飢えた人々は、白人や黒人たちのきびきびした動きを驚異の眼で眺めていた。そういうとき、働くといってもまともな仕事があったわけではない。近郊の人々は食物を担いで出てきては所々方々の駅の付近に闇市をつくり展げて、怪しげな饅頭や握り飯などから売り始めていた。それを買うためにも、私はどうしても働かねばならなかった。焼けなかった人々は、まだ金に換える何物かを持っていたが、焼け出されの私たちは一文無しというよりもっとひどい状態だったのである。

日本の会社がまだ働き出さないとき、人間を傭ってくれるところは進駐軍関係の仕事しかなかった。英語が片言でも喋ることのできる人間たちは、俄かに一段格が上ったように肩で風を切って歩いていた。私は有楽町の駅の傍にある進駐軍が暫定的に経営しているキャバレーのク

ロークになった。英語が全然できなかったのに、キャバレーの入口に押入ってイエスとノーをやたらと振り撒いていたら、雲つくような大男のニグロが来て、私にこの仕事を与えてくれたのである。日給制だった。一日わけも分らず働いているだけで翌朝の五時には一斉に帰りがけに百円札を渡してくれた。百円。私はその紙幣を摑みしめて飛ぶようにして家に帰ったのを覚えている。私の母は涙を流しながら、それでその日のうちに一升の闇米を買った。早速炊いた銀めしの目にしみるように白かったことも、立上る湯気の匂に気が遠くなりそうだったときのことも、私は決してこれから先だって、忘れることはないだろう。

勤務は午後六時から朝の五時まで十一時間の間に一時間ずつ二回休憩があった。私の仕事というのは入って来た客のコートや荷物を預かって番号札を渡すのが役目で、もし靴を脱ぐ習慣が彼らにあったなら、さしずめ私は下足番というところだっただろう。クロークには私の他に二人の女が働いていて、二人とも私より英語が出来、とりわけ一人はぺらぺらに喋ることが出来た。私たちの仕事はごく機械的に受取った品物と引換えに番号札を渡したり、番号札と引換えに品物を渡したりするだけなのだから、英語が分らなくても用が足りたが、それでも英語の話せる方が品物の受渡しを無言でやるより、オーライでもサンキューでも言った方がずっとうまい工合だった。それで私は英語の上手な木村ヨシ子について休憩時間の度に勉強することにした。教科書は進駐軍がGIたちに配布した日本語会話のテキストをヨシ子に貰ったものである。女学校では一年と二年の二学期まで学習したが、あとは敵性語として学校が教えない方針

だったので、私の語学の力は木村ヨシ子が、

「もう嫌や。面倒くさくなったわ」

と到頭音をあげてしまうほどお粗末なものであった。それでも私は懇願して、帰りがけのGIがチップ代りにくれるチューインガムやチョコレートを月謝に追加して彼女の教示に従おうとした。木村ヨシ子の英語というのも、文法からしっかり覚え込んだものではなく、彼女はロスアンジェルスに生れて十四歳のとき日本に帰ってきたというそのうろ覚えの記憶からなる英語だったから、随分怪しげなものだったが、それでも私にとっては習わないよりましだったのである。

お客のたてこまないとき、私は例のテキストと首っぴきで、単語を一つ一つ記憶しようとしていた。アメリカ人相手の仕事では、言葉が不自由ではどうにもならないと考えたからである。私の働いている「パレス」というキャバレーでは、クロークより収入のいい働き方が他にいくらもあることに気がついたからでもあった。なんにしても日本が敗けてしまってアメリカさんの天下になってしまったのだから、まず言葉からものにしておかないことには埒があかないという意識が私にはあった。喋れるようにさえなれば木村ヨシ子なんかとチップで差をつけられることもないと私は思ったのだった。私は暇さえあればテキストを展げて、単語と構文の暗記につとめていた。

「何を読んでるんだね？」

私の頭の上から大声が降ってきて私を驚かせた。顔を上げると私が初めて「パレス」に来たとき、私にクロークの職を与えた大男の黒人兵が立っていた。

「本を、読んで、いるんですよ」

私はたどたどしく答えた。

「本を？　何の本をだね」

「英会話」

彼はグローブのような掌を展いて、大仰に感動してみせた。掌の中が生々しく白いのと、眼を剝いてみせた白眼と、開いた唇の内側が生肉のように赤いのが印象的だったが、悪い感じはしなかった。どういうものか「パレス」に来るＧＩのほとんどがニグロだったから私は黒い肌の人間を見るのにもう馴れきっていたのである。終戦記念日というものが、ついこの間過ぎたばかりで、私もそろそろ「パレス」に一年の古顔になろうとしていた。

私が英会話の勉強をしていることに、相手はいたく興味を示したらしく、クロークの向う側から身をのり出すようにして、

「僕が先生になって実際的に教えてあげようか」

と彼は言出した。

「結構ですよ」

「どうして。僕は真面目に英会話を教えてあげるといってるだけだ。女がほしいのなら、あ

ちらへ行けばいいのだからね。あなたが心配することは何もない」

「でも、本がありますから、これが先生で、それでOKですよ」

「本は実際の役に立たない。発音のし方は、その本には書いてないし、元来それはGIが日本語を覚えるためのもので、日本人が英語を覚えるためのものじゃない。あなたはアメリカ人について英語を習った方が、その本より正確に、そして早く覚えられるんだ」

私は当惑して木村ヨシ子の救援を求めた。そのときの私の語学の力では、こうぺらぺらやられただけで圧倒されてしまったからである。それに彼の口臭は強烈で息詰るようだった。木村ヨシ子は私を抱えるようにして立つと、勤務時間中だから私的な会話は慎んでほしいと言った。すると相手は急に不機嫌になり、

「僕はジャクソン伍長だ。このキャバレーの支配をしている一人だ。それを知ってそういうことを言うのか」

とヨシ子につっかかってきた。

ヨシ子は心持ち蒼ざめた様子だった。私たちはニグロ専門のキャバレーに勤めていたのだが、私たちの給料は事務所の日本人から手渡され、アメリカ側の上司とは殆ど無関係だったからである。一年つとめている私も気がつかなかったし、ヨシ子も彼が「パレス」の支配人とはしらなかったらしい。だが間もなく彼女は流暢な英語でジャクソン伍長の機嫌をとり始めた。早口になると私にはよく分らなかったが、どうやら笑子(えみこ)は内気な娘で英語もよく分らないので、あ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

なたを怖がっているのだと言ったらしい。彼は私に向うと、

「私は怖い人間じゃない。間もなくあなたは分るだろう」

と言いおいて向うへ行ってしまった。

それから急に客がたてこんで、ヨシ子と私とは碌に口がきけなくなった。ジャクソン伍長が「パレス」の上層部にいる人間だということが分ったので、みだりにものを言うわけにはいかなかったのかもしれない。私自身も、大層残念そうに向うへ行ってしまった彼に悪いことをしたという小さな悔いを覚えた。中でも、女がほしいのならあちらへ行く。だから心配するなと言った彼の言葉に、私は少なからず感動していた。

ジャクソン伍長があちらと言ったのは、「パレス」の内部のことである。クロークの前を通り抜ければあちらには全く女たちが溢れていた。私同様に碌すっぽ英語の出来ない女たちが、分りもしない相手の言葉に応えて、げらげら笑い崩れ、抱き寄せられては嬌声をあげていた。全く欲しい人間には与えられる女たちなのであった。どういうものか彼女たちは例外なく赤や黄や緑の原色のドレスを着ていた。

だが私が感動したのは、私がジャクソン伍長によって、そういう女たちから区別された為ではない。私は実はそういう女たちの仲間入りをしようと思って英会話の勉強を始めていたのである。クロークの中で働く堅気の女たちも、ダンサーとして働く怪しげな女たちも休憩室は共有だったので、私は休憩の度に休んでいる女たちからダンスの基本的なステップを教わること

にしていた。いずれそういうものが必要になると考えたからであった。

人間というのは贅沢なものだ。贅沢に対してすぐにつけあがり易い。初めて「パレス」に来た日の朝、手渡された金額にあれほど感激した私は間もなくその給料に狎れてしまったのだ。母と妹が私の収入で充分着ることも食べることも出来ているのに、私は十円でも余計に収入のある方が望ましくなっていた。木村ヨシ子はいつの間にか進駐軍物資の横流しに与していて、クロークの収入以外にごっそり儲けては身装りをパリッとしたものにして、一頭地を抜いたように美しくなっていた。帽子から靴まで、つまり頭の天辺から足の先までアメリカ製品で掩いつくすと、格別美人というほどでもない器量だったのに人目を惹き、得意そうに小鼻をうごめかすと相当な別嬪さんに見えてくるのだから不思議だった。

私の当面の目標はこの木村ヨシ子だったが、彼女は自分のグループに私を入れる気はないらしかったし、私としても私の英語ではGIの配給品を値切った後も、彼らに気をよくさせるだけのお世辞は振りまけなかったから指をくわえているよりなかった。私はともかく厚さ二センチ半もあるテキストを丸暗記して、そこに書かれている言葉だけでも自由にこなせるだけの努力をしていた。〈この道をまっ直ぐ行けば総司令部に出られますか？〉〈この水は飲んでも大丈夫ですか？〉〈私はすぐ出かけなければなりません。用件はできるだけ手短かに話して下さい〉

トーマス・ジャクソンが私にデイトを申込んだのは、それから間もなくだった。非番の日、彼は一人で「パレス」に来て、踊りもしなければ碌に酒も飲まずにクロークにコートを預ける

と、吃驚するようなチップを置いて帰ったりしていたから、早晩そういうことになるとは考えていた。私の休みの日どりは、彼は事務所で簡単に調べることができたので、「パレス」で遊んだ帰りに例によってチップを私の掌に押込みながら、

「明日、映画を見ませんか、笑子さん」

と丁寧な口調だった。

「どんな映画？」

彼はペラペラと映画の題名を言ったが意味がとれずにぼんやりしている私を認めると、慌てて映画が嫌やだったらアーニー・パイルにショオを見に行ってもいい、と言い直した。東京宝塚劇場は進駐軍に接収されてからアーニー・パイルと名をかえてGIたちに慰安として豪華なショオを公演しているのであった。私は、喜んで行くと答えた。心の中の喜びは隠せなかった。私はこれまでにデイトということはしたことがないし、男から映画などに誘われたのもこれが初めての出来事だったからである。私はうきうきして木村ヨシ子たちに明日はジャクソン伍長とデイトをするのだ、アーニー・パイルのショオを見に行くのだと見せびらかすように喋ったが、彼女たちは顔を見合わせて意味ありげな薄嗤いを浮べてから、アーニー・パイルのショオは素晴らしいわよと答えた。

デイトはGIたちのクラブの食堂で、豪華な食事から始まった。ここは「パレス」と違って黒人より白人の方が多く出入りしていた。あんな大きなステーキを私は生れてから見たことが

なかったし、食後のパイに乗っかっていたアイスクリームのような美味は、まったく生れて初めてのものであった。私は人間が正直に出来ているものだから、この感激を日本人らしく慎ましく黙って抱いているわけにはいかなくて、一生懸命胸の中でテキストの頁を繰ってから、たどたどしい英語を大声で、

「私は私の生涯において、この素晴らしい食事を忘れることは出来ないでしょう」

と言った。

トムは大変に喜んで、自分もこんな素晴らしい食事をしたことはこれまでの生涯においてなかった。原因は笑子が一緒だからだと答えた。英語というのはなんという大仰な表現を使うものだろうかと私は自分の言ったことは棚にあげて可笑しくなっていた。

トムは健啖家(けんたんか)だった。生野菜のサラダを一息で平らげ、肉はグチャグチャに切り細裂いてから右手にフォークを摑み直して、ビールを合の手に飲みながら勢よく食べていた。西洋料理の食べ方に不馴れな私が、おかげで気楽に出された料理の味が分ったくらいである。食事中、トムは何度もフォークを止めて食べている私を満足げに眺めては、

「グー?」

と訊く。

「グー、グー。ベリーグー」

と答えると、一層満足して、トムは自分もまことに美味しいと言って馬鈴薯(じゃがいも)のフライをムシ

ャムシャと食べた。

アーニー・パイルのショオは話に聞いていたよりもっと目に眩ゆく美しかった。出演者の大半は日本人で、それが並んでラインダンスなどをしていたが、こればかりはどうも貧弱で見られなかった。間を縫って白人の歌が入り、白人のソロ・ダンサーが踊ったのが、だから一層美しく映えたのかもしれない。ともかく戦前も碌すっぽ娯楽らしいものには接したことのない私には、これもまた生れて初めて見る舞台だったのである。戦争が終ったことをあらためて感じ、そして私は日本人はアメリカに敗けたのだとまた感じなければならなかった。戦争中、私の働いていた軍需工場にも随分慰問団がやってきたけれども、こんな大がかりなものは一つもなかった。戦争に勝って、敗けた国民たちをラインダンスに使って、母国の唄や踊りを見るというのはどんなにいい気持なものだろう――と私は隣に腰をおろしているトムの横顔をじろじろと眺めていた。

トーマス・ジャクソンはそれを誤解したのかもしれない。やにわに私の片手を摑むと、大きな掌の中に私の掌を握り込んだ。私は狼狽し、声をあげそうになり、それから周囲の人々の気配を窺うと、それまで気がつかなかったが劇場に来ている人間は例外なくカップルが多く、女の大半は日本人で、どのカップルもまるでそうしなければならないもののように手と手を握り合わしていた。これがアメリカ式なのかしらと、私はトムを拒む理由が見つからないままに鷹に捉えられた小鳥のようにじっとしていた。もっとも、悪くない気持だった。トムはデイトの

始まりから怖ろしく紳士的だったし、私の一挙手一投足に敏感に反応していて、もし私が彼に手を握られるのが嫌やだという素振りを示したなら、すぐに手を放すことは分っていた。だから私はじっとしていた。そして胸をときめかしていた。私の手を握っているのは、紛れもなく男なのだ。あるいはそれが劇場におけるアメリカの礼儀とか習慣というものであっても、嫌いな女にデイトを申込む筈はなかったから、トムが私に好意を抱いていることは分っていた。トムがニグロであることに私がそのとき特殊な感覚を持たなかったのを不思議に思う人がいるかもしれない。しかし一年以上もニグロばかりが出入りするキャバレーに勤めていた私は、いつの間にか黒い肌には馴れてしまっていたらしい。それに劇場の中では白人も黒人も別なく同じ席にいて、どの兵隊も殆ど日本の女と並んでいた。だから私は恥じる必要はなかったし、それどころかまるきりうっとりとしながら、思春期と呼ばれる女学生の頃、戦時体制に入って男の子に胸をときめかすことも擬似恋愛の経験さえも持たなかったことを思い出していた。敗けた事実はやはり嫌やなものであったが、戦争が終ってなまめかしい平和が訪れているのをこうして知るのは悪いものではなかった。トムの大きな掌は、時々ゆるやかに動いて握りしめた私の掌を揉みほぐすように愛撫していた。私の指の間から奇妙な汗が滲み出ていた。

この日のデイトの間に、私は遂に一度もトーマス・ジャクソンをニグロだと意識したことがなかった。今になって考えてみれば、あの日の私は、勝ったアメリカ兵と敗けた日本人とのデイト、私にとって初めての男とのデイトということより他には考える余裕が無かったからでは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong